

---

# お伽の国のヒラヒル

きうい餅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

お伽の国のヒラヒル

### 【Nコード】

N6490A

### 【作者名】

きつい餅

### 【あらすじ】

本を読むことが大好きな、小学6年生のつるは蒜羽は、ちょっと変わりの「ふしぎちゃん」。勉強ばかりの現実が苦痛になり、本の世界へ迷い込んでしまう。そこで出会ったのは

## 第1話

笑わないで

ばかにしないで

ウソだと言わないで

お伽の国は本当にあるから

予鈴が鳴っても、ひるは蒜羽はその場から動こうとしなかった。

どこか遠くのほうから聞こえたような気がしたのだが、

そんなことはどうでも良くなってしまいうくらい、本に夢中になっていたのである。

「お伽の国」

蒜羽が今読んでいる、本のタイトルだ。

蒜羽は昔から大の本好きで、しかも幻想的な、非現実的な物語ばかり読んでいた。

その影響か、周りからはよく

「変わってるね」「不思議ちゃん」

などと言われたものだった。

お伽の国に住むマルウェルは、とても勇敢な魔法使いでしたか。

たくさん読んだものの中でも、特に気に入っている本がこれだった。

私も、行けたらな

「まーた、何を読んですの？蒜羽ちゃんっ」

蒜羽が顔を上げたその先には、クラスメイトの磨侑まゆが立っていた。

「お伽の国の物語だよっ」

「おトギ??」

「そう!!」

蒜羽は嬉しそうに、説明を始めた。

「マルウェルっていう男のコが住むお伽の国では魔法が使えて

魔法スクールとかあつてみんなはそこで魔法の使い方を学んで

で、マルウエルは旅するんだよ?! すごくない?!」

途中で一息もつかずに、一気に話した蒜羽だったが、息を切らして  
疲れている様子はなく、

むしろ、話し終えてすっきりとした顔をしていた。

「ふ、ふーん…すごいねえ…」

苦笑いの磨侑は、一応褒める。

本の内容にもだが、なにより息継ぎもせず、しゃべり続けることのできた蒜羽自身に

「よく読んでるよね、本。よっぽど好きなんだね」

「うんっ」

今までたくさんの本を読んできたけれど、この本は特に大好き。

好きなんだね、って言われると、すごく嬉しい!

お伽の国はきつと

毎日が幸せでいっぱい

うれしいコト

たのしいコト

ふしぎなコト

ずっとずっと、あるんだ

でも、現実

「でも本ばかり読んでいないで、勉強もしなきゃ。私たち、もうすぐ中学受験だよ?」

磨侑のもつともな意見に、蒜羽の顔が歪む。

わかってる…でも、勉強ばかりで、たのしいコトがない。

現実

本鈴が鳴っちゃうよ、という磨侑の忠告を受けなければ、  
赫羽は  
ずっとその場から離れなかったかもしれない。

## 第2話

二人は教室へ戻り、午後の授業を受けていた。

ひらかせ  
平枷蒜羽は私立小学校へ通う、小学6年生。

この冬は中学受験もひかえている。

「つまり、この公式によって…」

壇上にはいかにも厳しそうな目つきの女性が、黒縁の眼鏡を通して30人あまりの子どもたちを見ている。

長い髪は黒く、「魔女教師」と蒜羽は自分の中だけで呼んでいる。

だってあの、銀の細い棒（指示棒）を振る手つき、いかにも魔法をみんなにかけてるよう。

そしてその魔法にかかり、みんなは黙って、ただ鉛筆をノートの上で必死に動かしているだけ

同じ魔法使いなら、マルウエルが良い

もつとも、その魔法にかからぬ者もいた。

先ほどの本の続きが気になる蒜羽には、同じ教室の中にもいても、外から「魔女と子どもたち」という、別の物語を呼んでいる気分だった。

それはそれで、おもしろいかも

ところが魔女の魔法に、蒜羽はかかってしまったのである。

魔女はどうやら、「瞬間移動」が得意らしい。

「平枷蒜羽！！」

しかし名を呼ばれ、目の前にいるのは魔女ではなく、算数の授業担当の「教師」であるということに気づく。

瞬間、読んではいなかったが、教科書の下に忍ばせていた本「お伽

の国の物語」が、

蒜羽の代わりに返事をするかのごとく、元気にバサバサと音をたて、床に折り目をつけて崩れた。

「あ…本が、」

どうやら教師は、蒜羽が余所見をしていたのか、はたまた、「ココロココニアラズ」状態だったのかで、

声を尖らせ、彼女のもとへやってきたのだが、当の本人は床に這い蹲る本の心配をしていたわけで、

ゆつくりと伸ばす小学6年生の手よりも早く、「お伽の国」を拾い上げたのだった。

「授業に集中してないと思いきや、こんなものを読んでいたのね」  
「こんなものとはなんだ？」

”読んでいた”という事実を否定する前に、

”こんなもの”という教師の表現に、蒜羽は少し怒りを覚えた。

「違います」

蒜羽の反論をよそに、教師は本のタイトルを見つめ、

「「お伽の国」…？」

くだらない」

くだらない？

「これは没収する」

くだらない？

それは否定ですか？

私をも、否定しているのですか？

後者の”没収”より、

前者の言葉が突き刺さる。

「お伽の国はっ」

言ってしまうは最後、もう取り返しはつかなかった。でも言いかけて、やめるわけにはいかない

背を向けて、教壇へ戻りかけていた教師は足を止めた。

この「教室」という空間の中に音をなしたものは、時を刻む針と、誰かが落とし、転がった鉛筆。

流れるは、凍りつくような空気

「くだらなくなんか、ありませんっ！」

笑わないで

あんなに長く、本については喋り続けることのできた赫羽だが、この時は、たったこの二言だけで息を切らしていた。

ばかにしないで、ウソだと言わないで、

教師はゆつくりと振り向く。その顔は、怒りに満ちているわけでも、憐れんでいるわけでもなく、

「無」 だった。

お伽の国は、本当に

「現実を知りなさい」

ある、

んだよね？

あれ



どっちが、

どっちが現実、なんだっけ？

蒜羽の視界は、闇に包まれた。

## 第2話（後書き）

いよいよ次回から、蒜羽はお伽の国へ参りまうす！

### 第3話

いらっしやい

「お伽の国」へ

本当は、私も疑っていたのかもしれない。  
そんなもの、存在しないんじゃないかって。  
だからこそむきになって、必死になって、

真実に変えようと

していたのかもしれない…

でも、

きつとある、

そう信じていた気持ちに、

「嘘」はないから

ようこそ

あれ、また本を読んでは途中で寝ちゃったのか…、と蒜羽は目をあけて思った。

しかしその思考を、否定されるものが、彼女の目の前に広がっていた。

しばらく蒜羽は何も考えられなかった。

いつもうつかり寝てしまい、目覚めたときに目にするものは、公園で、小さな体をいっぱいに広げ、笑い声で駆け回る子どもたち

ではなかったから。

学校の帰り道にある、丸い砂場が特徴の、「まんまる公園」。  
その真ん中にある、背の低い、でもがっしりとした木に登り、太い

枝に座って、

蒜羽は本を読む。

お母さんには、はしたないからやめなさい、って言われるんだけど、ここはお伽の国に、なんだか近いような気がするからそんな風景だと思ったのに。

ここは、まるで

まるで

「お伽の国 …」

思わず口にした言葉は、蒜羽自身に緊張をはしらせた。

ドクン、と胸が波打つ。

嬉しいのか、それとも、まだ

疑っているの？

どこまでも続く、広い草原。

見たこともないような、真っ青な空、ときに除く白い雲。

どうやらここは丘の上のようだが、はたして、日本にこんな場所があったのかな…と蒜羽は考えていた。

数十メートル先はもやがかかったようで、あまり見えない。

あたりを見回しても、誰も

「ねえ、聞いてる？もヒもヒ…？」

いたっ？！

しかし人ではなく…

「う、馬…」

何これ何これ。

とってもかわいい、ぬいぐるみみたいな素材でできた(?) 蒜羽の半分ぐらいのお馬さん。

それが私に向かって、日本語を話している?!

「馬とは失礼な！確かに馬だけれどもっ！」

怒っているようだが、目がとつてもくりくりしているので、全然怖くない。

むしろ愛くるしい一方なので、蒜羽はぎゅっと抱きしめてみたくなつた。

「名前は何てゆーの？」

「あ…、平枷蒜羽…」

「ん？！ヒヒーンヒンヒ？！」

馬語？！つか無理矢理？！

「ひらかせひるはだって！！」

長いなあ、と呟きながらお馬さんは少し考えて、

「ヒラカセヒルハ、じゃあ、「ヒラヒル」で十分だね」

「ヒラヒル…」

蒜羽は初めてつけてもらった、「あだ名」というものに感動していた。

私のもうひとつの名前。

ヒラヒル　　なんだか、お姫様みたいですごくかわいい！

なんだか満足した気持ちになった後、

何か大切なことを尋ねなくてはならないのでは、と頭の中でひらめいた。

目線をお馬さんに合わせるため、かがむと、

緊張が一気に込み上げてきた。

その緊張をのみ込んで、

「ねえ、ここは、もしかして」

蒜羽が尋ねたと同時に、その声はやってきた。

「こんなとこで何してるんだ、ピーー！」

懐かしいような、何だか優しさの塊でできたような面影の青年の姿に、

蒜羽は自分の鼓動を止めてしまうところだった。



### 第3話（後書き）

次回から、例の魔法使いのお話でございます。よろしければ、次回もご覧になってくださいねっ

## 第4話

夢か、現か、  
そんなこと、どうだって良い。  
だって、目の前にいる。  
彼はいる

「今日は大切なお客様が来るからっていったる？ピニー」  
突如、一人と一匹の目の前に現れた青年は、  
”爽やか”というキャッチコピーを背負っているかのように、  
清々しく登場した。  
整った顔立ち、少し短めの金の髪。  
「だから、ちゃあんと迎えたじゃん！マルウエル！」  
ピニーと呼ばれたお馬さんの言葉がエコーする。

マルウエル、

マルウエル

マルウエルと呼ばれた青年は蒜羽に近づく。  
そして、微笑み、名は？とピニーに確認する。  
「ヒラヒルっていうんだよ」

マルウエルはかがみ、蒜羽にひざまずくような形をとった。  
蒜羽の右手をとり、顔に引き寄せる。

「ようこそ…ヒラヒル」  
名を呼ばれて、蒜羽は鼓動が波打つを感じた。  
二人の目が合う。

誰？  
誰を、見つめているの？



優しい、透き通る瞳。

「お伽の国へ」

信じて

本当に

お伽の国はあるから

蒜羽は溢れる涙を止めることが出来なかった。

本当だった、信じてた、

信じてたよ

「ヒラヒル…？」

「…会いたかった…っ、マルウエル…！」  
ずっと、ずっと

マルウエルは優しく微笑んで、人差し指で蒜羽の涙をすくう。

「泣かないで、ヒラヒル」

頬に触れた指先が温かい。

ああ、あなたはここにいるんだね

「お伽の国は、うれしいこと、たのしいこと…だからね」

その言葉に、蒜羽の涙は止まった。

両手で涙をぬぐい、満面の笑みを見せた。

「…うんっ…！」

そっだよ、哀しいことなんて何もない。

もう涙はいらない！

「さあ、ピニー！ヒラヒルにお伽の国を案内しよう！」

「おっK…！」

マルウエルは、右手を振りかざした。

「もしかして…！」

その行動に、蒜羽は緊張した面持ちで声をかける。

「魔法を使う…とか」

彼はにっこり微笑んだ。

なんて、笑顔の似合うヒトなんだ

と蒜羽は思った。

「そのとーり！！」

その声と同時に、ボン！！という音と共とともにピニーは白い煙に包まれた。

姿が見えなくなったと思いきや、すぐさまピニーの顔が見えた。

「……………」

二人はその姿に、しばらく絶句していた。

顔は可愛いぬいぐるみのピニー…しかし、

顔から下はリアルな馬に変化していた。

長い足、ひづめもちゃんとある、毛並みがさらさらの。

明らかに顔と体がおらず、とても不自然だった。

「……さ、いこっか、ヒラヒル」

「ちよつと！！ちゃんと顔も、シリアスにしてよ！！」

マルウエルは鋭いツツコミを受けた。

ヒラヒルは、これはこれでかわいいかも、なんて思っていた。

マルウエルはヒラヒルの体を持ち上げて、全身がシリアス（?!）になったピニーの背に乗せた。

そして自分もヒラヒルの前に乗り、二人は丘から駆け出した。

楽しんでおいで

限りある、夢の時間を



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6490a/>

---

お伽の国のヒラヒル

2010年10月11日14時10分発行